

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00544

研究課題名（和文）漢文文献読解の基層構造を解明するための日本現存漢籍訓点資料の精密記述研究

研究課題名（英文）Precise descriptive research of Kunten glossed texts of secular Chinese origin to elucidate the base layer structure of reading Classical Chinese texts in Sinosphere

研究代表者

小助川 貞次 (Kosukegawa, Teiji)

富山大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：20201486

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語による漢籍訓読の初期の様相を示す唐鈔本古文尚書と唐鈔本漢書楊雄伝を対象として、漢字文化圏における漢文文献読解の基層構造の具体的解明を目指した。これらの二資料は、数度に及び極めて複雑な訓点が付加されており、研究成果の基礎資料として釈文形式の解読文ファイルと漢文本文の諸情報を記述したExcelファイルとしてまとめることにとどめたが、当初の目的である漢字文化圏における漢文文献読解の基層構造の具体的解明は、発表論文等によってある程度達成したと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの訓点研究は、訓点資料を日本語資料と見做して日本語の言語材料を抽出するという方向性を持っていたために、加付されている訓点と漢文本文との関係の分析や、漢文本文が持つ諸情報の分析を視点とする研究は非常に少なかった。そのために訓点資料・訓点研究は日本語研究者にしか利用・理解できないという点で客観的・汎用的とは言えなかった。これに対して本研究は、そのスタート段階から日本語研究だけにとらわれない、より客観的・汎用的な研究を目指し、すでに日本の訓点資料・訓点研究も視野に含めて活動を行っている欧米を中心とする国際的研究のステージに関係付けられる点で、学術的・社会的意義は極めて大きい。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to elucidate the basic structure of the reading Classical Chinese texts in Sinosphere by focusing on the Tang-period manuscript of The Book of History (唐鈔本古文尚書) and Tang-period manuscript of The Book of Han, Yang Xiong Biography (唐鈔本漢書楊雄伝), which show the early aspects of the reading Classical Chinese texts in Japanese. These two materials have been added several times with extremely complicated glosses, and I have only compiled them as basic research materials in the form of a deciphered text file in exegesis format and an Excel file describing various information on the Chinese text. However, I believe that I have achieved the initial goal of elucidate the basic structure of the reading Classical Chinese texts in Sinosphere through the papers I have presented.

研究分野：日本語学・訓点語学

キーワード：漢籍訓点資料 漢文文献読解 加付概要 書誌情報 漢字文化圏 唐鈔本古文尚書 唐鈔本漢書楊雄伝

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ある地域で広く共有される古典語文献を、後世これと同類の言語、或いは周辺の諸言語で読解しようとする過程で、古典語文献の本文に何等かの符号や文字が書き加えられる(日本の漢文訓読の訓点のように)。この書込は日本語の仮名のように文字でなされることもあれば、句読点などのように符号でなされることもある。この書込を伴う読解方法は、翻訳とは異なり、元のテキストが持つ言語情報(漢文の場合であれば漢字・漢語・漢文文体)をできるだけ生かしながら、或いは温存させながら行なう点で巧妙な方法である。この書込を伴う読解の現象は、漢字文化圏の漢文文献のみならず、ヨーロッパの中世ラテン語注釈文献にも存在し、近年はそれぞれの研究の進展を踏まえた国際的研究交流が活発に行われており、漢文文献と中世ラテン語注釈文献の読解・書込を比較する研究も現れている。

国際的研究交流(*は研究開始後のもの)

- Network for the study of glossing (<http://www.glossing.org/>), founded in December 2015
- Workshop on comparative glossing practices, ICHoLS 14, Paris, 2017.8.31-9.1
- Glossing cultural change: Comparative perspectives on manuscript annotation, c. 600–1200 CE, University of Galway, 2018.6.21-22
- * • Handbook of Glossing Workshop, University of Galway, 2023.9.28-29

比較研究(*は研究開始後のもの)

- John Whitman: The Ubiquity of the Gloss, SCRIPTA Volume 3, pp.95-121, Sep.2011, The Hunminjeongeum Society
- ジョン・ホイットマン: 『訓読』は漢字文化圏だけのものか - 大衆宗教の普及と vernacular reading の成立 -, 『日本語学』416号、26-41頁、2013.11、明治書院
- ジョン・ホイットマン 2015: ラテン語教典の読法と仏典の訓読、新川登亀男編『仏教文明の転回と表現 文字・言語・造形と思想』、105-144頁、2015.3、勉誠出版
- * • Pádraic Moran and John Whitman: Glossing and Reading in Western Europe and East Asia: A Comparative Case Study, Speculum 97(1), pp.112-139, Jan. 2022, The Medieval Academy of America, DOI:10.1086/717331

このような国際的研究交流を一層推進していくためには、基礎データ(画像、テキスト記述データ)の作成と公開が不可欠である。中世ラテン語注釈文献の研究では、すでに高精細画像と書込内容を記述したテキストデータとが Web 上で公開されている(St Gall Priscian glosses)。これに対して漢文文献の研究では、日本国内では国および大学等研究機関が所有する一部の漢籍と仏典の画像、海外では敦煌漢文文献の画像(IDP、Gallica)、ベトナム漢文文献の画像(The Han Nom Special Collection Digitization Project)、一般的な漢文テキストデータ(漢籍では中央研究院・歴史語言研究所「漢籍電子文献資料庫」、仏典では SAT 大正新修大蔵経テキストデータベース)しか公開されていない。特に訓点研究で重要な資料を含む 8 世紀末から 12 世紀後半までの期間に日本国内に現存する 5000 点の訓点資料については、目録以外の基礎データ(画像、テキスト記述データ)はほとんど公開されていない。これらの訓点資料の中には書込・加点内容について解読結果を紙媒体で公開しているものもあるが、多言語で利用できるような形式にはなっていない。この点で、漢文文献の書込・加点内容の記述的研究は、ヨーロッパの中世ラテン語注釈文献の研究に比べて、格段に立ち遅れている。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパの中世ラテン語注釈文献の研究に比べて格段に立ち遅れている漢文文献の書込・加点現象について電子化テキストで精密記述を行い、その上で漢字文化圏諸言語における漢文読解の基層構造の解明を行なうとするものである。対象として 10 世紀から 14 世紀にかけて日本語による訓点を書き込まれた漢籍(中国古典籍)資料の中から、特に初期の訓読加点の状態を示す唐鈔本古文尚書(東洋文庫蔵、国宝)と唐鈔本漢書楊雄伝(京都国立博物館蔵、国宝)を取り上げる。いずれも唐時代 7 世紀の漢文本文(唐鈔本)に 10 世紀の日本人読解者による書込・加点(段落の区切りを示す「科段」、文と句の区切りを示す「句読」、漢字の派生義を示す「破音」、漢字音を分析的に示す「音注(反切注・直音注・声点)」、中国側注釈書から引用転記した「漢文注」、日本語の助詞助動詞等を符号で表す「ヲコト点」と仮名文字で表す「仮名点」)が施されており、これを精密に解読することで当時の日本語による漢文読解の様子が具体的に把握できる。

この二資料ともにすでに 20 世紀初めにはモノクロの複製資料とともに当時の碩学による解題

と解読文が公表され、学界では広く知られていた資料である。加えて近時、原寸原色の複製資料（唐鈔本古文尚書は『東洋文庫善本叢書』第7巻(勉誠出版、2015年)、唐鈔本漢書楊雄伝は『国宝漢書楊雄伝第五十七』(勉誠出版、2019年)）が相次いで公開され、また唐鈔本漢書楊雄伝については国立文化財機構が管理運営するe 国宝(<https://emuseum.nich.go.jp/>)で精密画像が公開されており、ここ数年で研究環境は格段に進化したと言える。ところが、当時の解題と解読文は誤認が極めて多く、原寸原色の複製資料を手にとっても精密な研究には堪えられない不十分なものである。一方、申請者は数十年かけて原本の熟覧観察に基づいた独自の解読資料と索引類を作成してきたが、いずれもコンピュータ環境が一般化する以前の手書きの資料類であるため、計量的な分析研究や研究内容の共有、国際的な比較研究が十分に行えていない。この二資料の書込・加点内容を精密に電子テキスト化することは、日本語における漢文読解の基層構造の解明が進展するだけでなく、漢字文化圏諸言語における漢文読解の基層構造の解明、さらには中世ラテン語注釈文献における書込・加点現象との比較を通して、古典語文献を巡る世界の普遍性の追求と解明に繋げることが可能になる点で、射程の長くかつ広い先駆的研究であると言える。

3. 研究の方法

3年の研究期間で、唐鈔本古文尚書と唐鈔本漢書楊雄伝の二つの訓点資料について、[A]既存の手書き資料の補正、[B]漢文本文の精密な電子化処理、[C]書込・加点内容の精密な電子化処理、[D]電子化テキストの校正、[E]原本の再現が可能な釈文(解読文)ファイルの試作、[F]国際的な比較研究に通用する構造化ファイルの試作、[G]研究成果の公開、の順序で研究計画を遂行する。

[2021年度]唐鈔本古文尚書[A][B][C]
[2022年度]唐鈔本漢書楊雄伝[A][B][C]
[2023年度]校正[D] 釈文(解読文)ファイルの試作[E] 構造化ファイルの試作[F]
社会に対する研究成果の公開[G]

4. 研究成果

当初目指していた[C]書込・加点内容の精密な電子化処理、[F]国際的な比較研究に通用する構造化ファイルについては、両資料ともに数度に及ぶ極めて複雑な訓点が付加され、それらを判別・記述することが困難であるケースが多いことから断念し、基礎資料として[A]釈文(手書き解読文)ファイルと[B]漢文本文の諸情報を記述したExcelファイルとしてまとめることにとどめた。当初目指していた漢字文化圏における漢文文献読解の基層構造の具体的解明は完全には成し遂げられなかったが、[G]研究成果の公開(5の主な発表論文等を参照)によってある程度達成することができたと考える。

特に「唐鈔本古文尚書の本文と訓点の問題」は、唐時代書写の漢文本文が複数書写者による「取り合わせ本」であることを精密に解明し、そこに加点されている日本語の訓点在校訂作業を含む漢文本文とどのように関係するのかを具体的に論じたものであり、また「漢語から見た古訓「ウグモツ」について」は、唐鈔本古文尚書の加点内容を中国側文献と丁寧に突き合せながら古訓の成立と後世への影響を論じたものである。いずれも従来の訓点研究の視点(訓点資料を日本語資料として利用するという方向性)ではなしえなかったものである。さらに「日本における訓点資料へのアクセス環境の変化と研究成果との関連」は、複製資料・画像資料や解読研究が入手しやすいという点で他の訓点資料と比べて恵まれた研究環境にある唐鈔本漢書楊雄伝について、訓点資料の解読は原漢文の構文・句構造を正確に理解し加点されている訓点を精密に分別しながら、また割注にある注釈内容は本文にどのように関わっているのかということを常に確認しながら行うべきであることを具体的に論じたものである。訓点資料へのアクセス環境が格段に進展してもなお、訓点資料に対する基本的な研究姿勢は保持すべきことを示している。

以上の研究成果の根幹をなす基礎資料が、ひとつは唐鈔本古文尚書、唐鈔本漢書楊雄伝の漢文本文と関連する諸情報を電子データ化したExcelファイルであり、もうひとつは原漢文の行取・字詰を保ちつつすべての訓点と書込注を精密に解読記述した「釈文形式」の解読文である。従来の(現在の)訓点研究では、加点された訓点を研究者が解読し、その結果を日本語文となるように読み下し文として示す「訓読文形式」の解読文が主流であったが、「訓読文形式」は研究者の漢文訓読の流儀や原文の加点内容にない言語が入りやすく、また日本語文であるために日本語研究者にしか利用できない点で客観的・汎用的とは言えず、国際的な研究のステージを考える本研究には向かない。Excelファイルも釈文形式の解読文も完成されたものではないが、本研究の成果として、これらのファイルを原本資料所蔵者の許諾のもと、科学技術振興機構のresearchmap上で公開する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 152
2. 論文標題 漢語から見た古訓「ウグモツ」について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 59-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 2022
2. 論文標題 日本における訓点資料へのアクセス環境の変化と研究成果との関連	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 令和四年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 41-2
2. 論文標題 外国語が変えた日本語 漢文の訓読によりて伝えられたる「誤報」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 100-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 76
2. 論文標題 唐鈔本古文尚書の本文と訓点の問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堤 智昭、田島 孝治、小助川 貞次、高田 智和	4. 巻 63
2. 論文標題 訓点データベースと点図の自動判別	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 情報処理学会論文誌	6. 最初と最後の頁 283-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20729/00216234	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Teiji Kosukegawa
2. 発表標題 Japanese Glossing Tradition
3. 学会等名 The Handbook of Glossing Workshop (University of Galway) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 大学精神としてのアカデミック・デザイン
3. 学会等名 第5回日本研究・日本語教育国際シンポジウム「世界をつなぐ日本語」(ハノイ工科大学) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 成簣堂文庫蔵周礼鄭注の「伝来」の再考
3. 学会等名 第128回訓点語学会研究発表会 (online)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 成實堂文庫蔵周礼鄭注について
3. 学会等名 第127回訓点語学会研究発表会 (online)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Teiji Kosukegawa
2. 発表標題 Changes in the environment for access to kunten materials and its relation to research results in Japan
3. 学会等名 SCRIPTA 2022 (Seoul National University / online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Bjarke Frellesvig and Satoshi Kinsui eds (Contributing author: Teiji Kosukegawa)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 570
3. 書名 Handbook of Historical Japanese Linguistics (Contributing author: Kunten texts of secular Chinese origin (Kansekki 漢籍))	

1. 著者名 ALDERIK H. BLOM; FRANCK CINATO; DAVID CRAM; DEBORAH HAYDEN; TEIJI KOSUKEGAWA; AIMEE LAHAUSSOIS; PADRAIC MORAN; ANDREAS NIEVERGELT; SINEAD O' SULLIVAN; JOHN B. WHITMAN AND MATTHEW ZISK (Contributing author: TEIJI KOSUKEGAWA)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 272
3. 書名 Glossing Practice Comparative Perspectives (Contributing author: Issues in Dictionaries Recording Kunten Glosses)	

1. 著者名 日本漢字学会（編）（分担執筆：小助川貞次）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版株式会社	5. 総ページ数 621
3. 書名 漢字文化事典（分担執筆：訓点と口訣）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関